



広島大病院の一室で、エクモにつないだ回路を手に語る宮本さん
(撮影・高橋洋史)

技磨き 人工心肺巧みに操作

広島大病院の臨床工学技士 宮本聡史さん

命守る人

コロナ禍の中で

新型コロナウイルス治療で注目を集めた人工心肺装置「ECMO(エクモ)」。

肺炎が進み、人工呼吸器で酸素を送っても救命できない人に使う「最後の切り札」とされる。広島大病院(広島市南区)臨床工学部門の副部門長、宮本聡史さん(42)は、その操作に欠かせない「臨床工学技士」だ。

医学と工学の知識を兼ね

備え、高度な医療機器を操る専門職。同病院には宮本さんを含め、21人がいる。「僕らにはエクモを使った治療の経験値がある。訓練も積んできた。コロナ患者だからと身構えず、いつもの治療ができるよう備えています」。宮本さんの言葉にはプロの自負がにじむ。エクモはいったん体の外

ずれも広島大病院で受け入れ、宮本さんも携わった。感染対策をしながらだったが、宮本さんは「専門医の助言を受けていたから、不安はありませんでした」とさり。基礎疾患があった高齢患者は救えなかったが、もう1人は退院へと後押しできた。

治療の最前線に身を置いて約20年。宮本さんは「必要とされている感」が大きい」とやりがい語る。新型コロナウイルスの流行を受け、昨

に取り出した血液から二酸化炭素を除き、酸素を加えて再び戻す装置だ。狙いは肺を休ませ、回復を促すこと。治療を始めたなら、装置を安定的に動かし続ける必要がある。「肝心なのは最初の設定です」と宮本さん。患者の体格や年齢、性別を踏まえて、血管に入れる管の太さや長さ、1分間に流す血液の量を決める。微妙な調整が必要で、技士の経験と技量が問われる。

県内で実際にエクモを使ったコロナ患者は2人。い

周りの「命守る人」を教えてください
記事の感想もお待ちしています



友だち登録はこちらから

houdou@chugoku-np.co.jp

命守る人の動画やこれまでの記事は中国新聞デジタルで



年は中四国9県の医療者向けにそれぞれ、オンラインも活用して研修会を開いた。「医療圈ごとにエクモを使える病院があった方がいい」。大学病院の一員として、地域のリード役も担う。
(田中美千子)

中国わいど